学校を創る

新生『県船』
～豊かな学校づくりを目指して～

県立船橋特別支援学校長　國井（くにい）　光男（みつお）

1　はじめに

『元気いっぱい　笑顔いっぱい　やさしさいっぱい』…今年度の本校のキャッチフレーズである。年度始めに，職員と保護者の全員による「総選挙」で選んで決めた。一年間，子どもたちも職員も保護者もみんなで元気も笑顔もやさしさもいっぱいに溢れるような学校にしていこうとの願いを共有して『県船』（愛称）の新たな学校づくりがスタートした。

2　新たな『県船』の豊かな学校づくり

⑴本校の概要

本校は，昭和53年９月に葛南地区の肢体不自由教育の拠点校として，船橋市上山町の地に開校した。今年度で創立39年目を迎えている。近年の課題であった過密化を解消するために，昨年度，船橋夏見特別支援学校が開校して中学部・高等部が移り，本校は小学部のみの学校となった。

小学部・中学部・高等部が一体となって取り組み築き上げてきた実績と伝統を土台に，新たな『県船』としての学校づくりにとりかかることとなった。

⑵小規模ながらのよさを生かして

子どもたちも教職員も半数以下となった。同時にＰＴＡの組織も縮小した。必然的に，人と人とが集まって生み出される校内の活気や熱気も乏しくなることが懸念された。

雰囲気的な面だけではなく，学校運営上の実務面からも，大なる不安・懸念が待ち受けていた。本校を熟知している教職員や保護者からの信頼厚い肢体不自由教育のスペシャリストや校務分掌の要となっていた多数の教職員たちが，分離によって去っていったからである。初任者を除くほとんどの教員が校務分掌や各学年の主任を担当せざるを得ない現状となり，まさしく，危機的な状況に直面していた。

どうすればこの危機を乗り越えていけるか，年度始めの日々はそのことが四六時中，頭の中を駆け巡っていた。そんな中で『ピンチをチャンスに』の言葉が浮かび，小規模になったことを嘆くのではなく，小規模だからこその学校づくりをみんなで思い考え，一体となって取り組んでいくことが大事，との結論にたどり着いた。その手始めに実施したのが，学校づくりにあたって教職員みんなの思いを結集できるキャッチフレーズを，全員による『総選挙』を行って決め掲げることだった。

教職員みんなで学校づくりで大事にしたいことを思い考え，選択・決定し，共有して学校運営を進めていくこととした。小規模だけに，誰が何をどのように進めているのかもわかりやすく伝えやすく，よさも課題も分かち合い支え合えるようになった。こうして，職員間の一体化が自然に進展し，活気や熱気も増して，子どもたちの生活の場が豊かに整えられていった。

⑶『チャレンジ！』を合言葉にして

子どもたちも，頼りにしていた中学部・高等部の先輩たちが校内にいなくなり，淋しさと不安とが広がっていたが，これまた『ピンチをチャンスに』変えていった。児童会が担当する「けんふな集会」や「運動会」をはじめとする学校行事等々，それらの企画や準備活動・対外活動において，これまでは生徒会の先輩たちにすべて委ねていた状況から，「自分たちが頑張って取り組まなければ・・・」との思い・意識が芽生え，

友達とよく話をしながら協力し合って取り組むようになった。

友達と協力し，力を存分に発揮して諸行事を成し遂げ，達成感・成就感を味わいつつ，自信をつけてたくましく成長してきた。

今年度は，集会や行事のみならず，普段の学級での活動や授業においても，『チャレンジ！』を合言葉にして，子どもたち一人一人が（ちなみに職員も）何かに挑戦していくことを推進している。

⑷ 関係する方々の思いと力を合わせて

特別支援学校の特色として，通常の学校の教職員（教員・事務員・栄養士・調理員・技能員等）以外に多様な職種の方々が学校で子どもたちの指導・支援に努めている。常時勤務している介助員・スクールバス運転手・看護師の方々，必要に応じて来校して指導・支援してくださる作業療法士・理学療法士をはじめ学校心理士・歯科医師・医療的ケアの指導医等々のみなさん方である。併せて，校外では，子どもたちそれぞれの主治医やかかりつけの病院，居住地の福祉行政機関や施設，各市教育委員会はじめ教育機関等々の方々が子どもたちや保護者・家族を支えてくださっている。

子どもたちにとって，必要不可欠な大切な方々であり，学校にとっても，子どもたちの成長をともに願って努める「同志」であり，欠くことのできない重要な「スタッフ」である。子どもたちへのねがいや目標を共有し合い，互いに情報を伝え合い，子どもたちや保護者・家族にとって，よりよい学校生活・家庭生活となるように思いと力とを合わせながら，このかかわりを大事にしていきたい。

⑸ 地域（法典地区）とともに

本校では，船橋市上山町（法典地区）に開校した時から，法典地区の子供会や自治会をはじめ近隣の方々にたいへん親しまれ，助けられてきたという歴史がある。地域の方の言葉を借りれば「船橋特別支援学校はこの地域の大事な一部であり，なくてはならないもの…」としてしっかりと根付いている。とてもありがたいことと心から感謝している。

今年度も，花壇に花を植えに来てくださったり，『ふなっこ作品展』の際に近隣の方々が盆栽やデザイン画等を出展してくださったり，自治会主催の講演会（音楽）に招待してくださったりするなど，本当に本校及び子どもたちを大事に思い，様々な形で支援・協力してくださっている。

それだけに学校としても，法典地区の一員としての自覚を持ち，諸会合や行事に参加し，共に地域の役割を果たしていけるように，できる限り努めてきている。併せて，交流校である法典小学校をはじめとして，近隣に在する旭中学校，船橋啓明高等学校との縁も大事にしてきている。こうして，本校の子どもたちを取り巻く環境が豊かに広がりつつある。

３　頼りがいのある学校に

本校は，葛南地区の肢体不自由教育の拠点校として歩んできている。同時に地域支援にも積極的に取り組んできているが，県教育委員会の方針もあって、「からだ」に加えて昨年度から聴覚障害「きこえ」を，今年度から視覚障害「見え方」の支援にも新たに取り組むようになった。

肢体不自由教育校が三障害種の支援に取り組むことは，県内初のことであり，全国的にも例をみないたいへん先駆的な取組である。その責任と誇りとを胸に刻んで、学校を挙げて精一杯努めていきたい。今はまだまだ「ひよっこ」状態だが，一年一年しっかりと実践と実績を積み上げていき，いずれは葛南地区全域から信頼を受けて頼りがいのある学校となるように一丸となって推進していく決意である。

４　おわりに

教職員と保護者が一体となって，子どもたちが主役として『より，元気に　主体的に　豊かに』生活していけることを期して，学校づくりに精一杯尽力していく日々が続く。

学校を支える

職員室文化の創造

～職員室の担任として～

大網白里市立大網東小学校教頭　石川（いしかわ）　和彦（かずひこ）

1　はじめに

大網東小学校は，昭和62年に大網小学校から分離して開校し，本年度，節目の30周年を迎えた。

学区には，市役所や商店街などの市の中心地域が広がっている。学校周辺では，建売住宅造成及びマンション建設が進み，児童数は増加傾向にあったが，近年では減少に転じている。平成24年度に，大網小学校の移転に伴う学区変更が行われ，一部学区が拡大した。

保護者や地域住民の教育への関心は高く，子どもたちへの防犯・交通安全等の見守りボランティア活動に対し，非常に協力的に取り組んでいただいている。

2　職員室文化の創造

昨年度，新任教頭として本校に着任した。教頭職の形容として，次の２点がよく言われる。「激務」「職員室の担任」。激務は，何も教頭職に限ったことではない。７年連続で，６学年を担任したこともあった。体育主任・研究主任・教務主任と，その時代ごとに常に激務であったと思う。

そして，私の仕事は職員室の担任へと様変わりした。４月当初，机に積まれた書類の陰で，しかめっ面をしてパソコンに向かう日々が続いた。このままでは，何のためにここに来たのか分からない…。そんな時に，新任教頭研修会での御指導が，私に肝を据えなくてはならないと諭してくれたのだった。

「『校長を外した教頭』と『教頭を外した校長』のどちらがキツイと思うか？」そう問われた。その瞬間，私の顔は見る見る赤くなっていった。「うちの校長は，教頭を外している。申し訳ない。」心からそう思った。

職員室の持つ空気や温度感は，そのまま教室へ反映されると言われる。職員室の担任として少なからず戸惑っていた自分がいたが，単純にこう思うことで乗り切ることができた。何も変わりはしない。担任は担任なのである。これまで同様，一担任として全力を尽くし，楽しく経営にあたっていこう。そう考えた。

「教育は人なり」と言われるように，学校教育の成否は，教職員の資質向上に努めることが極めて重要といえる。個々の力量アップを目指し，研究と修養に努めていかねばならない。そのためにも，大網白里市が力を注いでいる「職員室文化の創造」を実現することが大切となる。さまざまな立場の者がスクラムを組み，日々切磋琢磨（せっさたくま）してこそ，活気あふれる職員室を築き上げることができる。

学級担任時代に，好んで「One for all, All for one」という言葉を使った。教職員の不祥事根絶が叫ばれる今こそ，それが必要であることに気が付いた。現在，職員室に全員の寄せ書きを掲示している。

また，私は「職員室だより」の発行を始めた。教務主任時代にも「モラールアップだより」を発行していたので，その延長のようなものである。教頭として，職員皆に言わなくてはいけないことは山ほどあるが，それらを全て言葉にして伝えることには，いろいろと難しい側面もある。しかし，紙面を通じて伝えることは可能である。教育の技術，あるいは不祥事について等，伝えたいことは多岐にわたった。

学級担任として取り組んできたことが，実は教頭職に就いてからの自分に大いに役立っているのではないか。「経験は力である」と，改めて思う。左の写真は，職員向けの「夏休みのしおり」である。当然，担任なのだからしおりを作成する必要がある。こんなことにも，楽しく取り組んでやっていこう。そう思えるようになったことで，随分と目の前が明るくなっていった。

3　創立30周年記念式典

本年度節目の30周年を迎えた。この6月には，多くの皆様方の御支援を頂戴し，記念式典を挙行することができた。この行事を通して，教頭として更に多くの経験を積ませていただいた。改めて，学校というのは，教職員だけの力では何もできない場所であることを痛感した。学校運営には，保護者や地域の皆様方の理解と協力が不可欠である。教頭としては，それらの方々との関係性をいかに良好に築けるかが，重要

なポイントとなる。

ここでも私は，「ＰＴＡの担任」というような気持ちで臨んだ。30周年記念式典実行委員会・本部役員の方々との，深夜に及んだ会議は数えきれなかった。しかし，その分だけ，チームワークも強固なものになっていった。

当日，お招きした千葉県警察音楽隊の演奏に合わせて全校合唱した子どもたちの「ビリーブ」の歌声は，大きな感動を呼んだ。本校の教育の真髄をお見せすることができたことに，うれしさがこみ上げた。教職員や保護者の努力は，改めて子どもたちに反映するのだと，力強くうなずいた。

4　おわりに

学校現場には，喫緊の課題が山積している。学力，体力の向上，不祥事根絶，危機管理の徹底，安全安心な学校づくり，人材育成…。学校を支えるとは，それらの課題に，ひるむことなく対峙することだと考えている。これまでに御縁があり，出会うことができた全ての子どもたち，同僚，先輩方に支えられてきた日々である。とりわけ，教頭職に就いてから仕えた２名の校長の温かな御指導には，大いに救われてきた。支えるつもりが，支えられ続けてきた教師道。感謝の気持ちと初心を忘れることなく，今後も精進したい。

学校を動かす

私のできることから

富津市立天羽中学校教諭　保坂（ほさか）　典江（のりえ）

1　はじめに

昨年度，初めて教務主任として学校を動かす立場となった。学校教育法施行規則に「教務主任は校長の監督を受け，教育計画の立案その他の教務に関する事項について連絡調整及び指導，助言に当たる。」とある。これをもとにカリキュラムマネジメントの視点から，教務主任として学校教育目標の達成に必要な教育内容を教科横断的な視点で組織的に組み合わせていくことと，教育内容の質の向上に向けてＰＤＣＡサイクルを重視して取り組んだ。以下，具体的に取り組んだ内容について記す。

2　学校事情に対応した教育課程の編成

本校は，広大な通学区域を有しており，ＪＲ・路線バス・自転車通学の生徒を抱えている。そのため，時間的な制約が大きく教育課程の編成では，特に工夫が必要とされる。前年度の反省を踏まえ，より効率よく，負担が軽減されるように改善を図ることに力を入れた。授業時数の確保には，事前に授業の振り替えを行い，補欠授業を極力さけるようにした。また，授業の充実のために「天羽中学校授業規律」を実態に合った内容に定め直し，視覚的にも訴え，呼びかけて定着を促した。

各行事への取組は，早めに担当者と打ち合わせを行うようにした。意図的・計画的に進められるように，余裕を持って連絡や調整を行い，職員や生徒の頑張りが点と点を線でつながるように努めた。

3　天羽中学校区小中連携教育

本中学校区は，４つの小学校から入学するため小中連携教育を組織的に推進している。教務主任が担当の，６年生の１日体験入学では，小学校と中学校の滑らかな接続のために内容の工夫改善を図るとともに，中学校の日常活動の在り方を見直す機会とした。授業参観・体験授業・交流集会・交流給食を実施した後，入学説明会を開催した。計画立案の段階で，４つの小学校と詳細に打ち合わせを行い，円滑に進められるようにした。中学校生活を知ってもらうために，体験授業では音楽科による中学校の校歌を習得する授業を行った。さらに，授業参観では保健体育科で毎時間積み上げている集団行動を見てもらい，体育祭で発表している集団行動へのつながりを実感してもらう機会とした。

4　ＯＪＴの効果的な取組

若年層教員が増えている今，若い先生方が力を発揮し，働きやすい職場づくりは必須であると考える。タイムリーに，ポイントを絞った声かけや働きかけを大切にしてきた。実践例や選択肢を提示して説明する等，できるだけ情報提供をした。職場での自己有用感や存在感を実感しながら働いて欲しいという思いで，任せられる場面は任せ，修正が必要な時に支援を行い，できるだけ若い先生方の考えや思いを尊重してきた。

5　おわりに

周囲の先生方に助けていただき，教務主任を努めることができた。また，教育行政での勤務経験が教務主任の仕事の裏付けとなり，感謝している。

組織を構成するのは個人である。強固な組織を目指すために，校長の学校経営の下に，学校運営を活性化させることが大切であり，個々の教師力を向上させる必要がある。今後も，学校を動かす一員として全力を尽くしていこうと思う。

研修を生かす

企業派遣研修で学んだこと
～人を生かす組織づくり～

県立市原特別支援学校長　遠藤（えんどう）　和弘（かずひろ）

1　はじめに

現在特別支援学校では，教職員を育成し，組織として，生かしていくことが不可欠である。

私は，鴨川グランドホテル（以下当社とする）での研修でその手法を学び，今後の学校経営に生かそうと考えた。

2　学びを学校経営に生かす

当社は，南房総を代表するホテルである。

私は，料飲課コンベンションに属し，会場のセッティング，結婚式の際のスポットライトやドリンクコーナーの係等の研修を行った。そこでの学びと学校経営に生かすことを以下にまとめる。

⑴コミュニケーションの充実

ホテルの仕事を進める上では，一つの課単独で仕事が完結するものではない。そこで，各課の課長間や従業員間でも，日常の挨拶やコミュニケーションが明るくスムーズに図られている。このコミュニケーションが人間関係づくりの潤滑油となり，社員が生き生き仕事をしていると感じた。

教育現場においても，挨拶やコミュニケーションが気持ちよくできる児童生徒や職員を育てることは重要であると考える。児童生徒の場合は，挨拶がしっかりでき友達や先生とコミュニケーションがとれるということが，将来の就労等につながると考えている。

職員の場合は，当社の社員のような丁寧な挨拶や豊かなコミュニケーションが図れるようになることで，生徒指導がうまくいったり，職員間の連携がスムーズになったりという効果が期待できる。

⑵丁寧なＯＪＴによる新入社員の育成

当社の新入社員は，10日間にわたる新任社員研修カリキュラムによって，社会人としてのマナーから料理の出し方，和室での立ち居振る舞い等ホテルの仕事についての教育を受ける。その後は，実践の中で，所属する課の課長や先輩から丁寧なＯＪＴによる教育を受けている。

日々の取組の中で，先輩の職員と初任や若手の職員が組んで仕事をする機会をつくる等の工夫をし，当社のような丁寧なＯＪＴができるようにしたい。

⑶おもてなしの心

当社の社員は，「どうしたらお客様に喜んでもらえるか，満足感を感じてもらえるか」と常に考えて仕事に取り組んでいる。

学校でも，児童生徒や保護者の立場に立って，「どうしたら相手に喜んでもらえるか，満足感を感じてもらえるか」という視点を忘れないようにしたい。職員が，しっかりした教育観をもつことと併せて「おもてなしの心」をもつことで，いろいろな価値観やニーズをもった児童生徒や保護者，地域の方々に対応できるようになると考えている。

3　おわりに

当社では，社員が生き生きと自信をもって仕事をすることで良いサービスにつながり，当社へのリピーターが生まれてくる，という良い循環ができていた。学校でも同様に，職員が生き生きと仕事をし，より良い教育を展開することで，児童生徒や保護者から職員が信頼され，学校が良い評価を受ける，という良い循環をつくっていきたい。

授業を創る

考えることを楽しむ子 算数が好きな子を育てるために

「魅力ある授業づくりの達人」認定教員
成田市立公津小学校教諭　榎澤由理子（えのさわ ゆ り こ）

1　はじめに

「考えることを楽しむ子を育てたい！」

「算数が好きという子を増やしたい！」と願い，それを目指して算数の授業をしている。

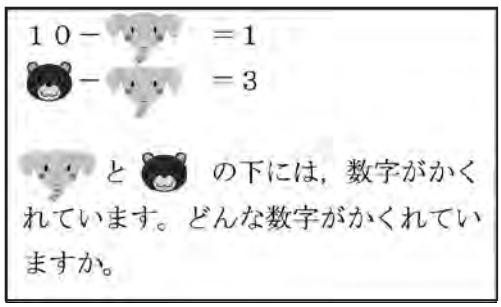
考えることを楽しむ子，算数が好きな子を育てるには，考える力を付けられるようにすることが大事だと考える。今まで，たくさんの先生方に御指導いただきながら実践してきたこと，算数の指導で大切にしていることをまとめた。

2　考える力を育てるために

⑴1年「ひきざん」

考える力を育てるための手立てとして，素材を大切にしている。考えたくなる問題となるように，身近なものや考える必要感が感じられるものを扱う。そうすることで，児童の素直な思考や表現を引き出したいと考えている。

「ひきざん」では，単元の最後に，５月から学習してきた加法及び減法のまとめとして，既習事項を根拠として思考を進められるような問題（被減数や減数，差を動物の顔で隠した問題）を解決する時間を設定した。正しく計算する力とともに，順序よく考えて答えを導き出す力を付けさせたいと考えた。



児童は，ブロックを操作したり，○の図をかいたりして考え，「10からひいて１だからぞうは９。」「くまから９をひいて３だから，くまは12。」と答えを導き出した。全体の話し合いでは，どの考え方もぞうが隠している数から考えていることに気付くことができ，それはなぜかについて話し合った。１年生なりの言葉で「一つがわかったら，もう一つの答えをみつければよい。」とまとめることができた。

⑵2年「図をつかって考えよう」

考える力を育てるための手立てとして，素材の提示の仕方を工夫することも大切だと考える。例えば，実際にやってみることで問題場面が把握しやすくなる。また，途中まで提示することや不十分な状態で提示することで，「えー！それじゃわからないよ。」「○○がわかればできるよ。」という声が聞こえてくれば，その時間に考えることや求めることをより意識させることができるようになる。

「図をつかって考えよう」では，問題文の関係表現は加法（減法）なのに，減法（加法）を用いて解決する問題を扱う。また，問題解決のために積極的にテープ図を使うのは初めての単元となる。そこで，単元の始めは一度に問題文を提示するのではなく，

箱の中にあめが入っている。
↓
１２個取り出して見せる。
↓
箱の中には１３個残っている。

というように，具体物を使って少しずつやって見せるように提示し，「箱の中にあめが入っています。12個食べました。残りは13個です。箱の中にはあめが何個入っていたでしょう。」という問題を全員で作っていった。問題解決の際は，絵や，○の図，矢印などを使って，自由に表現させ，それらを整理する形で，○の図を四角で囲んだり，実際のテープを使ったりして，テープ図のイメージをもてるようにした。

単元の後半には，教師が読んだ問題文を，複数のテープ図カルタの中から探す活動を通して，問題場面をテープ図で表現する力を高められるようにと考えた。カルタの中には２つの数値が□となっている不完全なテープ図も入れておき，児童の気付きから学習問題を設定した。問題作りをしてテープ図を完成させることで，テープ図を活用したり，同じテープ図なのに異なる種類の問題文（問題場面）を作れることに気が付いたりして，思考を深めることができた。

（机上のテープ図カルタ）

⑶４年「考える力をのばそう」

考える力を育てるために，まずは，自分で考える時間を設定し，みんなで考える時間も保障したい。そこには，「ああ，そっか。」「同じ考え方だ。」などの学びがある。「いつでも同じことが言えるかな。」「共通することは何かな。」と発問することで，別の場合についても考えるきっかけを与えたり，きまりを見付けたりすることを引き出すことができる。「どうしてそう考えたのかな。」と発問することで，理由や根拠を明らかにさせて説明できるようにする。

「考える力をのばそう」では，２量の共通部分に着目し，問題構造を図に表して問題を解決できるようにしていく。

シュークリーム１個とプリン３個を買うと３６０円でした。シュークリーム１個とプリン５個では５２０円でした。
シュークリームとプリンの値段はそれぞれいくらですか。

そこで，友達の説明を聞いたり，全体で図のよさを感じたりすることができるように，自分で考える時間は短く設定した。全体での話し合いでは，どうやって考えたのかそれぞれの考え方を比較・検討した。全てを説明するのではなく，友達の説明の続きを全体で考えたり，グループの友達と考えさせたりすることで学び合えるようにした。また，式の中の「－」や数が○の図や線分図のどの部分を表しているのかを考えたり説明したりできるようにし，図に表して順序よく考えれば解決できることをまとめることができた。その後の適用問題を解く際には，「線分図の方が早くできそうだ。」「式が見えた。」という姿が見られた。

３　おわりに

考えられたところまで丸をつける。考えを説明した児童をみんなの前でほめる。間違った考えも，できたところまで認め，そこからその考えを生かしてねらいに迫っていく。児童の立場になり，一緒に考えることも心掛けている。児童と一緒に考える中で，時には，「ちょっと難しくてわからないなあ。」という姿を見せると児童が生き生きと話し始める。そういう算数の授業をつくり，「考えることを楽しむ子」「算数が好きな子」が増えることを目指して，私自身もよく考え，研修に励んでいきたい。

子どもを知る

自己への挑戦

～「やってごらん」～

松戸市立小金小学校教諭　菱沼（ひしぬま）　綾（あや）

私は昨年度，１年生を担任した。子どもたちは何でも「～していいですか？」と聞く。そのたびに私は，「やってごらん。」と話してきた。子どもたちに，様々なことに挑戦し，自分で考え，乗り越えていける力をつけたいと考えていたからだ。

思いを持って教師の道を選んだが，いざ子どもたちと向き合ってみると，毎日が戸惑いの連続だった。日々の授業や，子どもとの関わり方に悩み，他の先生方と自分を比べることも多かった。

しかし，子どもたちに少しでもよい指導をしたいという思いは人一倍強く持ってきた。子どもたちに話す「やってごらん。」を，私自身にも言い聞かせてきた。初任者研修で質問をし，自分から指導をお願いするなど，指導力を高めるために努力した。今年度は周囲の協力もあり，県教育研究会松戸支会（算数・数学教育部会）で授業を展開し，意見を頂いた。私自身も様々なことに挑戦する中で，子どもたちの挑戦する心，互いを認め合う心が育っていった。修了式の日，入学時と終了式間近の写真を並べ，プレゼントした。子ども自身も驚くぐらい，表情は温かく、頼りがいのあるものとなっていた。一年間一緒に過ごしてきた中での成長を感じ涙が出た。

まだまだ指導力が足りず，壁にぶつかることも多い。しかし，何かに挑戦しなければ，そこから成長することはできない。まだまだ悩んでばかりで，助けられてばかりだが，挑戦する心を忘れず，これからも教壇に立っていきたい。

子どもを知る

生徒と向き合う

～初任者研修を通して学んだこと～

多古町立多古中学校教諭　閑野（かんの）　勇飛（ゆうひ）

教員生活が始まった１年目，学校現場に入り強く実感したのは，学級経営や部活動，校務分掌や教材研究，事務処理など数限りなく感じる仕事量の多さであった。特に学級経営では，集団として行動することや人間関係の難しさに頭を悩ませた。そんな時，私の力になったのが，「同じ職場の先生方の支え」と「初任者研修」である。

同じ職場の先生方には，多くの場面で支えていただいた。生徒だけでなく，職員間のつながりも大切なのだということを痛感した。そこで，たくさんの人に支えられているからこそ，自分が何事にも懸命に取り組むことが恩返しにつながると感じ，様々なことに挑戦することができた。また，初任者研修では，実践活用できる資料や先輩教員の講義，受講者同士での演習などを通してたくさんのことを学ぶことができた。学校現場で日々感じる「今，目の前にいる生徒たちのために何ができるだろう」という悩みの多くは，「目の前にいる生徒たちのためにこんなことがしたい」という強い思いに変わっていった。学級という集団をつくる生徒一人一人と真剣に向き合うことが大切だということに気付かされた。

次代を担う生徒たちに対して，私たち教員がすべきことはたくさんある。その第一歩が目の前にいる生徒と「向き合うこと」だといえる。生徒と向き合い，寄り添い，共に歩むことを大切にしながら，生徒のために行動できる教員でありつづけたい。